追手門学院大学教育研究所紀要
第 32 号　2014 年 3 月　pp.123–140

基盤教育機構　主催　意見交換会
「教養ゼミをどうするか」の記録

基盤教育機構副機構長　**梅村　　修**

1. はじめに

基盤教育機構の最重要課題は、共通教育の改革である。全学部共通の基礎教育体制の確立、本学独自のリベラルアーツ教育の実現に向けて、これまでの「共通科目」を「基盤教育科目」と改め、「学ぶ力・考える力・生きる力の育成」として再構築することが目標に掲げられている。具体的には、①基盤教育の充実化・実質化・共通化のために、各学部で卒業必要単位数をそろえること、②学修の質向上と学修時間の確保のために、履修上限単位を引き下げ、GPA 制度を活用すること、③基盤教育に関する開講科目の運営、調整等を、基盤教育機構が責任を持って担当すること、④学部横断型ゼミの充実・展開をはかるために、従来の「教養ゼミ」を春学期にも開講することに加えて、「オープンゼミ」「プロジェクト」「表現コミュニケーション」など、少人数、双方向の体験型学習の場を豊富に提供すること、⑤国際社会に適応するグローバル人材養成のために、「実用英語」や「日本語表現」といった科目を新設および拡充すること、などが掲げられた。

なかでも、「個性と協働力をみがくゼミナールの追手門」というスローガンは、基盤教育機構が目指す教学改革の目玉であり、ぜひとも実現しなければならない。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習と呼び名はさまざまだが、教員による一方向的な講義形式の教育から、仲間との協働を通した主体的な学習を取り入れたアクティブラーニングへと、教育方法を変革していかなければならない。こうした教育方法の質的転換は、必ずしも従来の知識注入型の講義形式の授業スタイルを否定するものではない。その意義を十分認めながらも、大学全入時代の多様な学習者に対応できるように、大学教員は、グループディスカッション、ディベート、グループワーク、フィールドワークなどの教育手法に慣れ親しんでいく必要があると言われているのである

ところが、本学の教室では、学生と教員の双方向的な関わりは、まだ道半ばという印象を受ける。すなわち教員の授業方法は、あいかわらず慣れ親しんだ一方向的な講義形式が主流であるようだ。

この状況を、手をこまねいて放置しておくわけにはいかない。

基盤教育機構を中心に、アクティブラーニングのキャンペーンを張る必要があるだろう。本学の

共通教育は、初年次教育を手始めに、講義中心のカリキュラムから、少人数・双方向型の参加体験型協働学習を豊富に取り入れたカリキュラムに主舵を切っていかなければならない。先述の「オープンゼミ」「プロジェクト」「表現コミュニケーション」等、先を見越した科目群の拡充と同時に、今すでに行われている学生参画型の授業を掘り起こし、後押ししていかなければならない。

そこで筆者が着目したのが、「教養ゼミ」である。

2.「教養ゼミ」開設の趣旨

教養ゼミは、2012 年度の秋学期から、全学開放ゼミナールとしてスタートした。2011 年 12 月 8 日の教務委員会資料には、次のような「開設の趣旨」が記述されている。

1．異なる学部学科学年の学生の出会いによる知的刺激と人間的刺激
2．専攻以外の問題領域やディシプリンに触れること
3．1 年生にとっては大学での学びを具体的に体験できること
4．教員サイドとしては、学科カリキュラムとは離れて、自身の研究内容や学生に伝えたい学問分野についてゼミという形で開講できること

「教養ゼミ」は、正面切ってアクティブラーニングとか PBL とかを謳っていない。しかし、卒業演習のゼミナールとは違い、学部を横断し学年を縦断した多様な学生が、自らの興味や関心に基づいて、主体的、能動的に特定のテーマを選びとり、仲間や教員との双方向のやり取りに中で学んでいく。この姿は、いわゆる社会人基礎力を磨くための少人数、双方向の体験型ゼミナールになる余地を十分含んでいる。

ところが、「教養ゼミ」の振り返りは十分行われていなかった。担当教員や履修した学生から、個人的な感慨は漏れ聞こえてくるものの、鳴り物入りで全学に導入された新規科目だったわりには、その後、等閑に付されていたきらいがあった。

3. 意見交換会の開催

ぜひ、2013 年度春学期のうちに、教養ゼミ開設の趣旨に照らして、2012 年度秋学期に行われた教養ゼミを振り返り、2013 年度秋学期、および 2014 年度の教養ゼミを、より充実したものとするための提言を求めたい。

そこで、基盤教育機構では、5 月 9 日の教授会で、2013 年度秋学期、および 2014 年度の「教養ゼミ」開講にむけて、2012 年秋学期の教養ゼミ担当教員、学生を集めて、「教養ゼミをどうするか」と名付けた意見交換会を開催することになった。開催日時は 2013 年 7 月 18 日（木）の 4、5 時間目、開催場所は 1 号館 3 階の第 5 会議室だった。企画の内容は、

（1）村上亨機構長から開会のあいさつ

(2) 筆者から「教養ゼミ」に関する学内アンケートの報告
(3) 昨年度秋学期教養ゼミ担当教員（磯貝健一先生、土肥眞琴先生、藤原英賢先生、村上喜郁先生、梅村）からの取り組み報告
(4) 当該教養ゼミ履修学生からの感想・意見
(5) 教職員と学生によるグループディスカッション、および成果報告
(6) 高尾常務からの講評
以上のスケジュールで進んだ。

4. アンケートの結果

さて、筆者は意見交換会に先立って、次項に掲げたようなアンケートを実施した。この結果について、各項目ごとに、回答をまとめておきたい。

(1)「異なる学部学科学年の学生の出会いによる知的刺激と人間的刺激」について、自身の教養ゼミをどのように評価するか。

・KI 先生

履修者数は開講要件ぎりぎりの 5 名。内訳は以下の通り。

社会学部：2 年生 1 名、1 年生 1 名

英語コミュニケーション学科：4 年生 1 名

アジア学科：2 年生 1 名、6 年生 1 名

このうち、社会学部 1 年生は最初の 2 回出席したのみでリタイヤしたが、残り 4 名は最後まで意欲的にゼミに参加した。学部学科、学年がそれぞれ異なる 4 名にとって、このゼミは相当刺激になったようにみえる。

・MN 先生

受講生は各学年にまんべんなく人がいた。一度、学生が授業後、他学部の人はあんなふうに考えるのですね、と話しかけてきたことがあり、学生はそれなりに普段にはない出会いを楽しんだのではないかと思う。

・DY 先生

学部学科、学年を越えた形の教養ゼミは、学生間のグループワークを通じた、コミュニケーション能力の育成という面において、有意義だったかと思われる。特に 1 年生にとっては、早い段階でのゼミ形式でのディスカッションは、刺激になったと考えられる。

・NK 先生

学部がかたよらずに受講していた。抽選のおかげで友人同士の受講がなかったので、個人が周りを気にせず個別にテーマ向き合える授業になっていたと思う。テーマに関心のある学生が単独

で受講していたのでディスカッションも成功し、大変よいゼミになったと思う。テーマに関心をもっている点において学生同士にもよい意味での共通性があったと思う。

・IY 先生

受講生は、経済学部の学生が半数でしたが、グループで対話をするという際に、他の学部の学生達が、意見を言い合う様子に、触発されたようです。プロジェクトを、受講生自ら企画、運営したので、受講生の間の一体感もできあがったと思います。

・KY 先生

少人数のゼミであるので、意見交換が出来て、履修学生も知的刺激を受けているものと思っています。

・YS 先生

様々な学生との出会いの刺激を求めていたのですが、それほど感心することはありませんでした。かなり、発言が少なかったからです。ボランティアで出席された年輩の社会人の方が、毎回の映画を観て議論に参加されました。

・TS 先生

学生同士が親密になるような機会は残念ながら作れなかった。

・YM 先生

大いに評価できると考える。学生同士もさることながら、他学部の学生との出会いで、担当教員である私自信の刺激も大きかった。

・TM 先生

5 学部 4 学年の学生がいることで、上級生が下級生の面倒を見る、リーダーシップをとるなど、特に下級生は人間的な刺激を受けたのではないか。知的な刺激については、学部学年が異なることよりも、テーマによると考える。幸福というテーマは、特定の学問分野に偏らないため、学生の自由な発想、意見が引き出せた。

・MD 先生

履修登録者が開講下限の「5 名」という少人数であり、5 名の内 4 名が心理学部、1 名が経営学部。学年は 4 年生 1 名、2 年生 4 名と学部構成と同様、「多様性」という点で十分ではなかった。積極的に授業に参加したのは心理学部生 3 名のみ。同学部生であっても、学年が異なり、普段接触がない学生達であったので、人間的刺激は生じたと考えるが、知的刺激は、個人差が大きくなってしまったと反省している。

・EF 先生

全ての学部・学科から学生が参加していたので教員には刺激のある授業だった。

・SM 先生

K 先生、O 先生、私の 3 名の得意分野を活かしたリレー式の授業をしました。履修者は経営学部が多かったのですが全学部にまたがり、学年も 1〜3 回生にまたがり、20 名という実名性社

会でお互いに名前を呼び合う関係が構築され、知的刺激も人間的刺激もあったと思います。

・KH 先生

学部・学科・学年の壁を越えての学習は、余暇生活実習（ゴルフ・キャンプ・スキー実習）で体験しているが本演習においても人と人の繋がりを学ぶことができ大いに人間的刺激を受けているものと思われる。知的刺激を与えるものとして活動量刑を用いてデーターをとり、時間の都合もあり処理をしたものを講義に用いたが、効果は少なかったように思われた。

・HA 先生

1 年生や 2 年生もいたが、学生同士の交流の場という感じはなかった。

(2)「専攻以外の問題領域やディシプリンに触れること」について、自身の教養ゼミをどのように評価するか。

・KI 先生

参加学生のうち、私のゼミの履修経験がある者は 2 名、他の 2 名は全く異なる専攻を持つ学生であった。実際にゼミを行う中で、むしろ後者 2 名の方がゼミの内容に興味を持ち、積極的に発言していた。この意味で、参加者数がごくわずかであったとはいえ、標記の目的は果たせたように思われる。

・MN 先生

授業のテーマ自体、学生それぞれにとって専攻ではないが興味ある主題だったわけで、毎回の授業報告として要求するレポート作成のあり方も学科では経験できないものであっただろう。

・NK 先生

私は子ども、家族、地域の立場からいじめについても研究していますが、児童福祉論という教科のなかでは一部分にすぎないため、いじめのテーマを深く話し合う機会はなかったのでよい経験になった。学生たちはこれまでの学校生活のなかで疑問に感じていたことをじっくり話すことができて（友人には自分を演じているため、自分を知っている友人がいたらこうはいかなかったが、幸いだれも教養ゼミに知り合いがいなかったので）自分の本心を遠慮なく話すことができたという意見が多くあった。

・KY 先生

履修学生それぞれが立脚する専攻・専門的な視角から、それぞれが考えてもらえればよいと思っています。

・YS 先生

映画の主題によっては、学生個々の相違が少しあると感じた程度です。

・TS 先生

心理学部の学生がわりに多く、グリムに限らず民話などの分析を心理学者が分析する例は多いので、関心を持てただろうと想像する。

・YM 先生

先にもあげたように、経営学だけでなく、経営あるいはマネジメントの現場での考え方を意識した演習づくりを指向した。

・TM 先生

経済学的な説明は、心理学部、社会学部、国際教養学部の学生には新鮮のようであったが、経済学的な問題など存在せず、ただ問題があり、どのように見るかが重要であることを説明することが、自分の専攻の意味を理解するうえで重要と考えた。

・MD 先生

ゼミ内容が元々心理学分野であったため、心理学部生にとっては教育学・組織論分野に若干触れる程度の刺激にとどまったように思う。

・EF 先生

所属学部以外の学生にはいい機会だったと思います。

・SM 先生

授業のアンケートをとりました。もっとも印象に残ったことについての回答は、追大周辺の歴史や民俗についてと、追大周辺の企業訪問に集中しました。上級学年は前者について「今まで知らなかった」という発見、下級学年は後者について「社会のしくみ」についての好奇心が触発されたようです。

・KH 先生

本演習のテーマが「生涯体育へのいざない」ということで健康への意識を持ってもらうことを主課題としたが学生はどの程度だったのかは充分把握できない、他の科目との違いは 11 名が皆出席で、レポートについても自分の意見を出したりと少なからず効果があったものと思われる。また、20 名の受講生のうち 3 名が本年度違う科目を受講している。

・HA 先生

国際問題に関心のある学生も数名いたが、大部分は通常の講義の様な感じの学生が多く、学ぼうとする気概に欠けていた。

(3)「1 年生にとっては大学での学びを具体的に体験できること」について、自身の教養ゼミをどのように評価するか。

・KI 先生

残念ながら、上述したように、唯一の 1 年生（社会学部）が早々にリタイヤしたため、この目標は果たせなかった。本人に確認をとっていなかったためリタイヤの理由は不明であるが、ゼミ履修者中彼のみが 1 年生であったこと、および、他の履修者がいずれも相当に意欲的な学生であったことから気後れしてしまったのではないかと想像される。

・MN 先生

学生が知っている「伊勢物語」を読む読み方は、高校の古典の授業（与えられた本文を現代語訳する）。それとは異なり、江戸の注釈に従って批判的に読むことになかなか慣れないようであったが、そのこと自体がむしろ、これが大学での学びの具体的な経験であったであろうことを示している。

・NK 先生

一年生にとって小中高の記憶は生々しいものであるため、大学生活で薄れていく前にいじめについての経験を誰かに聞いてほしいという欲求があるようです。このテーマに関しては学年は関係なく、相互交流に適したテーマでした。

・IY 先生

残念ながら、1 年生の受講生はいませんでした。けれども、どのゼミでも、受講した 1 年生は、上級生の人達から、たくさんのことを学ぶ機会になったことでしょう。

・KY 先生

教養ゼミは自分の学部学科にとらわれることなく、興味のあるテーマが選択でき、かつそれを少人数で考えることができるのが魅力だと思うので、基本科目などが主な履修科目を占める 1 年生にとっては、大学の授業に対して、また違った印象をもつことができて、次年度以降の演習科目への橋渡しにもなろうかと思います。

・YS 先生

1 年生の受講生が多かったのですが、彼らはイギリスの映画に惹かれただけで、それ以上に積極的に観てみようという行動には出ていませんでした。だから、教養ゼミは自己発表できるような学年に相応しいのかな？

・TS 先生

外国語でひとつの物語を読み切ることの、しんどさと達成感は感じてもらえたと思う。

・YM 先生

1 年生には厳しい部分もあったが（というのも、半年では自分の専門分野の学習があまり進んでいないため）、それでもゼミという大学特有の形式の演習には、1 年生たちも興奮を覚えているように見えた。

・TM 先生

異なる学年を含んだグループ単位の学習、発表は、とりわけ 1 年生には重要と思う。2 年以上の学生の姿を見るだけでも大きな教育効果があると思う。分担して調べる、資料を持ち寄る、議論する、まとめる、発表するといった作業は、1 年生に知的刺激を与え、上級生も、異なる見方・考え方を調整するという貴重な経験ができるのではないか。

・MD 先生

1 年生の履修者がいなかったため、評価不能。

・EF 先生

商業科出身の学生だともしかしたら学んだ内容はしれているのかもしれません。

・SM 先生

教室で先生の話を一方的に聴いて、それをノートして暗記し、定期試験に備えるという授業とは違った、現場参加型の授業としては、1 年生にとって新鮮であったのではないかと思います。

・KH 先生

1 年生は 5 名で、開講当初はおとなしい印象だったが後半は積極的に取り組んでいた。

・HA 先生

1 年生にはゼミがどういうもので、専攻以外の分野への関心を伸ばすいい機会だと思うが、やはり勉強不足と気概に欠けていた。

(4)「教員サイドとしては、学科カリキュラムとは離れて、自身の研究内容や学生に伝えたい学問分野について、ゼミという形で開講できること」について、自身の教養ゼミをどのように評価するか。

・KI 先生

学科の開講科目である講義やゼミにおいては、どうしてもより多くの学生が興味をもてるよう、最大公約数的なテーマを掲げざるを得ないが、教養ゼミでは、少人数を対象に、相当に先鋭的なテーマを選択できるため、教員サイドとしても面白みのある授業を実施できる。また、必修ではなく純粋な選択科目であるため受講生の意欲も高く、本学で私が担当する科目中、唯一ディベート形式の授業を行うこともできた。なお、詳細については、2012 年度国際教養学部自己評価報告書の私の原稿も参照されたい。

・MN 先生

学科カリキュラムの制約は致し方ないなかで、こういう授業担当ができるのは教員としても楽しい。

・NK 先生

大人数の講義となると学生個々に意見を聞くことはできません。とくに社会学部のゼミでは、雰囲気で選ばれることが多く、テーマで選んでゼミに来てくれることが少ないため、逆にゼミでは自分の研究テーマに近づくことができませんでした。この教養ゼミを通じて本来の大学のゼミのあり様で私が思ってきた形に近いように思いました。学生同士も学年に関係なくテーマに関心のある学生同士が受講するほうがお互いにとってよりよいと思いました。

・IY 先生

私自身はゼミを持っていないので、自分の掲げたテーマを選んで受講してくれた意欲のある学生と、学びあうことは、とても貴重な機会でした。

昨年度の教養ゼミの目的は、地域のプロジェクトを自ら立ち上げるというものでした。ゼミ生

で企画し、安威・愛着プロジェクトネーミングで、安威小学校の学童の子供達と共に、おむすびフェスタというイベントを実施することができました。彼らのすばらしい企画力、行動力で、良いイベントになりました。

・KY 先生

貴重な機会だと思っています。

・YS 先生

あまり専門的なことをやりませんでした。それよりも、入門程度を心がけました。学生は、自ら選んで発表する映画しか観ていないので、うわべだけの議論しかできなかったのが実情です。映画を観た学生に司会をしてもらったのですが、その議論に参加する学生（つまり、実際に映画を観ていない）が少なかったのが残念でした。

・TS 先生

グリム童話については別の講義でも扱っているので、その学生たちにドイツ語の原文に触れてもらう機会ができたと思う。逆に今年度の講義に出るモティベーションになったかもしれない。

・YM 先生

教員を含めた少数での対話が可能な点で、学生側のニーズやシーズが見えた点でも意義があったと思われる。

・TM 先生

自分の学部以外の学生に教えることは、学生の理解する点、理解できない点を知るうえできわめて有効である。他学部の学生が理解できないことは、おそらく自分の学部学生にも理解できないのではないか。

・MD 先生

ゼミ形式で教員・学生がインタラクティヴに学び合える機会としては非常に有り難く有意義であったと思う。教育者としての自分のあり方を再度見つめ直す機会となった。

・EF 先生

研究内容とは全然リンクしない内容ですのでこの意味ではあまり効果はありませんでした。

・SM 先生

「○○学」というディシプリンの解説から入るのではなく、目の前にある現実から何を考えるかという手法で、初歩的ですが、学生目線に沿った学問の実践を伝えることができたのではないかと思います。

・KH 先生

健康という大きな課題を学生とともに取り組むことができたことは有意義であった。

・HA 先生

教養ゼミといっても私のゼミはレベルが高すぎて、学生はついていけなかった様な感じがする。

（5）2013 年度の教養ゼミに向けて、改善点があるとすれば、どのような点だと思うか。

・KI 先生

同一教員が開講するゼミを複数年履修できるようシステムを改善する必要がある。これは、当初教養ゼミを開設するにあたっての既定方針であったはずである。

・MN 先生

教養ゼミの開設趣旨からすれば、4 年間の履修を認める（同一教員の開講クラスを含む）ことを実現する必要がある。一度だけ、お試しに受けられるよ、という性格のものであってはいけないのでは。セメスターの授業では、扱うのに制約の大きすぎるテーマを持続的に開講するとしたら、学生は履修を継続するのでなければコマギレ受講になってしまう。また、年度ごとにどんなに魅力的なテーマで開講があるかもしれない。学生の成長はテーマに対する魅力感知に影響する。ほかにも、いまは履修者の最少人数を規定しているが、1 対 1 の授業を経験することも学生には大きな意味があるのではないかと思う。

・DY 先生

学年を越えたゼミであるが、受講生が比較的低年次が多いため、それに合わせた教育内容に改善していく必要がある。

・NK 先生

知らない者同士が同じテーマに関心をもって集まるグループのよさをより引き出すような構成を考えたいと思います。

・IY 先生

教養ゼミのことを知らない学生も多いと思うので、多くの学生に興味を持ってもらうことは必要だと思います。可能であれば、継続して受講できる方が望ましいと思います。

・KY 先生

可能であれば、より多くのメニューを学生に提示してあげられるとよいかと思います。

・YS 先生

やはり、学生中心のゼミ運営がいいと思うのですが、意見を述べるまでにかなりの時間が必要であることを実感しました。それを今回に生かそうと思っています。

・TS 先生

ドイツ語を読み進めるだけでなく、各人の童話とのかかわり、思い出などを話し合う時間も持てるとよい。

・YM 先生

4 年生の履修に関して、就職活動等で出席できない学生、また必要な単位が取得済みとなり、出席しない学生（とおぼしき学生）が見られた。現在のシステムでは同コマの複数回履修が不可能である。場合によっては、より理解を深めるために、同じコマを複数回履修出来ても良いかとも思う。あるいは、先修条件のある教養ゼミや学部・学年を限定したものも可能性は考慮すべき

ではないかと思う。

・TM 先生

特にないが、この種の授業は多くの学生が受けるべき科目であると考える。したがって、可能な限り多くの教員が開講すべきではないか。また、半期ではなく通年で、一回限りではなく、何回でも受講できるのが好ましい。

・MD 先生

2012 年度は、ゼミ内容の学生への伝え方（説明）が非常にまずかった。また最初からハードルを高く設定してしまった（時間外学習がかなり必要になる事）事も履修学生が少なかった一因であると考える。

2013 年度はこの点を反省し、ゼミ履修を通じて得られるものを明確にし、学生の関心事である「就活」に関連付けた説明をしたところ、19 名の履修登録者があった。

・SM 先生

もう少し行動半径を広げたい。自転車 20 台を備えてくれたら、もっと魅力ある見学コースを加えることができると思います。

・KH 先生

初回の講義で「出会い」を重視することが、以降の人間関係はもちろんのこと学習効果にも表れると思われる。

・HA 先生

私のゼミも履修生が 26 名で人数が多すぎた。また通常の授業のように授業中に居眠りをする学生が多く、本当に教養ゼミに関心を持っているのか疑いたくなるような事態であった。

（6）今後、このような学部学科、学年を問わない形のゼミを増やしていくことについて、どのように思うか。

・KI 先生

個々の教員の負担が過重にならないよう配慮するという条件付きで、推進すべきだと思う。現行のカリキュラムにおいて最早有名無実化している「副専攻」制度よりも、このような形式のゼミを増やすことが学際的カリキュラムを実現する近道であろう。

また、「教養ゼミ」形式のゼミが増えることにより、自身が所属する学部・学科で孤立傾向にある学生に「居場所」－この言葉は余り好きではないが－を提供する効果もある。

・MN 先生

設問趣旨不明瞭ですが、教養ゼミの開講数を増やすことなら教員の参加という、この企画への支持を歓迎すべきである。また、教養ゼミとは別に、学部学科のゼミなどについてオープン化するというのであれば、当該単位での議論が必要だと考える。

・DY 先生

学年を問わない形については、1 年生～2 年生に対する低年次推奨ゼミと 3 年生～4 年生向けの高年次推奨ゼミに分けた方が、取り扱うテーマによっては、知識格差の視点から、効率的と考えられる。例えば、低年次ゼミは「気づき」や「主体性」といった基礎的な育成が中心となると考えられる。また高年次ゼミは、各領域の学問体系に触れることによる「考える力」などの学士力育成がメインになると想定される。

・NK 先生

とてもよいことだと思います。上級生は上級生としての自覚ができ、お互いに学びが深まるように思います。

・IY 先生

大いに賛成です。その際、継続して受講できる。通年で受講できるというのが、望ましいと思います。

・KY 先生

基本的に賛成です。

・YS 先生

やはり、やりたいことを自由にできるのが大学の良さだと思っていますので、共通の関心・問題意識のある学生との関わりを大切にしたいと思っています。

・TS 先生

良いと思います。

・YM 先生

大いに賛成であるが、結果的に教員の負担増になることが心配である。実際に、昨年度は経営学部の担当持ちコマ数は 5.5 コマであったが、私は教養ゼミを志願して追加したので 6 コマとなった。あくまで、教員が自身の希望により教養ゼミを持つことは好ましいが、なんらかの強制力が働くようであれば問題であると考える。

・TM 先生

当然、増やすべきである。①自分の学部の勉強をより深く理解するため、②幅広い教養を身につけるため、③コミュニケーション能力の身につけるために、この種の授業は、もっと増やすべきである。

・MD 先生

大学生として必要な基礎的・汎用的能力を身につけていく事、「学びの面白さ」に気づかせる事について、このような学年・学部縦・横断型のゼミ（少人数の参加型演習）は、非常に効果的だと考えるので、定着・発展させていく事が重要と考える。

・EF 先生

基本的に反対です。各学部・学科にはそれなりの授業科目があります。それとの兼ね合いがあ

りますので、新規の授業科目を入れる前に共通教育・各学部・学科のカリキュラムの再検討が必要でしょう。

・SM 先生

弾力的なアカデミックカレンダーの運用も含め、フィールドワークや合宿型に特化できたらおもしろいと思います。

・HA 先生

教養ゼミはいいことだと思うが、ゼミのサイズを 5–6 人ぐらいの小さいものにし、本当に関心のある学生だけに絞ってもらいたい。

(7) その他、お気づきになったことをご自由にお書きください。

・MN 先生

基盤教育機構が教養ゼミについて、こういうアンケートをして、総括と今後の行方を占うような事をするのに適当か否か、失礼ながら、その点には留保を感じながら所感を記しました。

・DY 先生

教養ゼミは現在半期であるが、取り組む課題・テーマによっては通期ゼミがあれば、学生にとっても、学ぶ力の育成に役立つと考えられる。

・NK 先生

学生は同じ学部・同じ学年だと受講する授業も同じメンバーになることが多いことを案外息苦しいと感じているのだということがわかりました。「好きでつるんでいるわけではないので友人のいない教養ゼミはホッとする」という意見が心に残りました。「大学は勉強するところで、周りは関係ない」という原点に立ち戻る機会であると思いました。「一人になる」機会を与えることは学生自身の「自分の将来を考えること」に必要だと思います。

・YM 先生

2012 年度は経営学部では私を含め 2 コマの教養ゼミが開講されましたが、2013 年度は私のみ 1 コマの開講となりました。これは、教養ゼミの趣旨・意義が学部教員に周知されていなかったことが原因ではないかと思われます。今後、教養ゼミを引き続き実施するのであれば、この点は改善すべき点だと思われます。どのような形で、教養ゼミの賛同者を集め、バラエティに富んだプログラムを提供するかが本案件のカギを握っていると思われます。

・TM 先生

教養ゼミについては、その趣旨が十分に浸透していない懸念がある。1 年生向けなのか。そうであるならば、1 年のいないゼミは無意味なのか。ナンバリングをして、複数のゼミを開講するのが好ましいのではないか。

・MD 先生

昨年の教養ゼミは少人数になりすぎ、グループ学習が成立しなかったので、教務課の了解を得

た上で、南山大学で開催された「体験学習研究大会」に学生を引率・参加させた。

参加に係る経費（交通費・大会参加費）は教員の自己負担とし、学生負担は当日の昼食代のみであったが、1 名しか参加しなかった。他大学生及び体験学習に関心のある社会人等との交流の機会になればと考えたが、これもハードル設定が高すぎたのかもしれない。

ただ、参加した学生 1 名にとっては、玉川大学・南山大学の学生、教員との交流が出来、外部から本学が高く評価されていることを認識する等、非常に新鮮で印象的な体験となったとレポートに記述があった。

現在は秋学期・週 1 回の授業形態であるが、実施形態についてもフレキシブルに考え、他大学や地域社会との交流、フィールドワークを予め組み込んだカリキュラム設定を今後検討していきたい。

・EF 先生

周知の方法をご検討下さい。

・SM 先生

学生が毎回楽しそうだったのが一番うれしかったです。

・HA 先生

逆説的になるが、単位をもらえないゼミにして自分の教養を高めたいと思う学生だけを募集すべきであると思う。単位をもらえないゼミであれば本当に関心のある学生だけが参加すると思う。

5. アンケートの回答に対する筆者のコメント

以上のアンケートの回答に関して、筆者は意見交換会の席上で、スライドを使いながら、次のようにコメントした。

教養ゼミをどうするか、アンケート結果報告

教養ゼミを実施した後、2013 年 5 月に、18 人の教養ゼミ担当者に教養ゼミの振返りアンケートを実施し、15 名から回答を得た。その結果を報告する。なお、受講希望者が 5 人以下のゼミは不開講となった。

教養ゼミを評価する意見としては、【学部や学年を超えた出会いがあった。知的刺激や人間的刺激がもたらされた。コミュニケーション能力の育成が図れた。立場や学年、学部を超えて関心あるテーマについて語り合った。受講学生自らがゼミを企画・運営し、一体感が醸成できた。上級生、下級生間の人間的刺激があった。調べ、資料を持ち寄り、議論し、発表するサイクルは 1 回生に知的刺激を与えた。少人数、双方向、体験的、現場参加型学習は新鮮であった。】

結果から見るとポジティブな回答が多かったが、一方、数は少ないが消極的な意見もあった。

【うわべの議論に終始して知的刺激も、人間的刺激も乏しかった。学生同士が親密になる機会は作られなかった。】

改善点としては、次のような意見が示された。【同一教員のゼミを複数年履修できるようにするべき。通年で、一回限りではなく、何回でも受講可能にするべき。低年次推奨ゼミと高年次推奨ゼミに分けた方が知識格差の観点から効率的である。不開講をなくすために 1 対 1 の授業もありにすべきだ。できるだけ多くの教員が教養ゼミを開講するようにするべきだ。毎回出席が可能な学生のみが履修できるようにするべきだ。】

教養ゼミを増やしてゆくことについて【賛成。過重な負担をかけない事を条件に推奨するべきである。やりたいことを自由にやれるのが大学の良さ、ぜひ進めるべし。専門性を深め、幅広い教養を身につけ、コミュニケーション能力を身につけるためにもっと増やすべきだ。】

今後、学部・学科、学年を問わない形のゼミを増やしてゆくことについては【教員自身の希望が優先されるべきで、強制力が働くのは問題である。共通教育全体の中で見直しが優先されるべきでやみくもに増やすのは反対】といった意見が寄せられた。

6. 教養ゼミ担当教員からの報告

次に、昨年度秋学期教養ゼミ担当教員を代表して、国際教養学部の磯貝健一先生、経営学部の村上喜郁先生、基盤教育機構の土肥眞琴先生、経営学部の藤原英賢先生からの取り組みの報告が行われた。以下に、要約を書きとめておく。

■国際教養学部アジア学科　磯貝健一

専門のゼミでは不可能な、学生間で議論ができるような内容にすることを意識した。

イスラムはマイナスイメージが強いが「ヨーロッパのイスラム」をテーマにし「フランスにおけるスカーフ論争」を取り上げたところ 5 人の受講生が集まった。5 人の内訳は英語コミュニケーション 4 年、アジア 2 年、6 年、社会 1 年の 4 人で運営した。

テキストは「神の子・人の子」とし、知識のないディベートは空虚だと考え、両者が噛み合うために基礎的な知識は身につけさせることも重視した。必修の演習は「やらされ感」が強く、ディベートは困難であるが、教養ゼミの内容の応用は可能である。アジア学科 2 年生の参加者の感想として「必修は面白くないが教養ゼミは楽しい」とのことであり、救済の可能性があると感じた。

教養ゼミは（知識の量の少ない）1 年生が頑張ることが秘訣であり、頑張らせることが教員の役割だと考えている。

■経営学部経営学科　村上喜郁

専門は経営管理論。教養ゼミ実施に当たって意識したのは「経営学は実学である」「経営学の特性に気がついてほしい」の 2 点であった。学びと実践の間に壁を作っていることが感じられるので、「学ぶこと」と「それを使うこと」、特に実践の中で知識を使うことを意識してゼミ運営にあた

った。

■経済学部ヒューマンエコノミー学科　土肥眞琴

参加者は 5 人、そのうち心理学科学生 4 人であり、ゼミの特性から心理学科学生の参加者が多かった。切り口は失敗談を披露するところから始めた。グループ学習をもくろんだが、参加者が少なく成立しなかった。また、趣旨説明が十分ではなかったこと、アドバンスモデルの使用が失敗であったこと、内容と学生レベルミスマッチがあったことなどが反省点として挙げられる。学生をみていると、就職から離れた本来の「学び」を志向していることが伺えた。

■経営学部経営学科　藤原英賢

教養ゼミでは「簿記と会計の入門」を取り上げた。経営学部の「入門簿記」のダイジェスト版であり、会計という学問の性格（評価原理）を説明し、小テストの実施、毎回出欠をとった。教養ゼミの趣旨からは少し外れるが「やり直し」の簿記という性格があり、また、他学部（心理・社会・国際教養）の学生の需要もあった。

要望としては、新入生演習と教養ゼミの差別化、教養ゼミとオープンゼミの違いがわからない、といった疑問点もある。ただ、教養ゼミを担当した印象は、ネガティブではなかった。

7. 教養ゼミ履修生からの感想、意見

次に、磯貝ゼミ、今堀ゼミ、梅村ゼミの学生から、教養ゼミ履修の感想・意見が述べられた。

■磯貝ゼミ受講生

・いままでと違い、とてもよい授業でした。
・身近な問題について、学部を越えて話せる。
・教養ゼミは現在一個しか取れないので、春も開講してほしい。
・学部間が持つ考え方の違いがとても新鮮だった。

■今堀ゼミ受講生

市民が地域のコミュニティの中で、自らの創造力を発揮するというトラジション活動について報告が行われた。具体的には小学生と大学生がおむすびを作るというプロジェクトについて説明された。その中では、例えば、地域の食材の調達、朝市の農家との交渉などのプロジェクトで苦労した点などについて、報告が行われた。

その上で「小学校の先生になりたい学生にとって、とても役立った」「他学部との交流がとてもよかった」「自分たちで考えるよい機会になった」という感想も取り上げられた。

■梅村ゼミ受講生

「学生が授業をつくる」「学生が先生になる」という、学生にとってとても新しい形のゼミが行われたという報告がなされた。学生は少人数・双方向といった授業を作ることが課されているために、アイスブレイク、エクササイズなどの多様な工夫を行い、「授業をいかに楽しくするのか？」

という視点から、各講義を作り実践したと、報告が行われた。

その上で、「先生をするという新鮮さ」「自分自身を成長させる」「良い聞き手とは何か？について考える機会が増えた」などの感想が発表された。

8. グループディスカッションの成果報告

次に、「学生が望む双方向型授業をどのように作っていくのか」というテーマで、教職員と学生によるグループディスカッションが行われ、各グループの基盤教育機構教員から成果報告が行われた。

■A グループ

何をもって双方向性とするのか？という疑問から、議論がスタートした。そして、アグレッシブ型、ライブ感、意外性といった言葉で表わされる少人数教育が望まれているとした。その上で学生自身が創っていく講義、それは誰かが創っていくのではなく、自ら創る講義もあるのではないか？という意見が取りあげられた。

■B グループ

学生が望むとは、学びが続く講義であり、少人数とは 5 人～20 人である。また双方向とは、先生と学生の間の交流だけでなく、学生同士との交流もある、多方向性の授業であると議論が盛り上がった。その上で、どのように作っていくのか？という問いには、「高年次・低年次型に講義を分ける」「教養ゼミをより低年次に位置付ける」などに、意見が集約された。

■C グループ

少人数教育は学生との対話であり、ある種の「偶然の出会い」でもある。そして双方向型においては「気づき」が重要であり、そのためにはカリキュラムは「フルコース型」「バイキング型」というコース設定が必要となる。加えて、「一定の知識」「目標設定」「役割」が重要であるとされた。

■D グループ

シラバスの有効活用によって、授業目的の共有が大切であると報告された。そのためにはビラや映像などを用いた先生の事前のプレゼンも面白いのではないかという意見が取り上げられた。その他、アイスブレイクや、学生の反応が高い「ミニッツペーパーの返却」などの講義の工夫が紹介された。

9. 講評

最後に、高尾典史常務理事から、意見交換会全体についての講評が述べられた。

今回のシンポジウムにおける各報告は興味深く、教員・職員・学生のグループワークも盛り上が

り、貴重な交流の場になった。「教養ゼミが学生にとってどのような効果があるのか？」「ゼミの意味づけをどう考えていくのか？」「教養ゼミをどのように位置づけていくのか？」という問題意識からも、今回のシンポジウムは、意義深いものとなった。

また、講義とゼミの関係性をより見つめ直すことも今後、大切であり、ゼミを見直すよい機会になったと思う。